ないかと思われる．その時の収集方法および手順にまで論及して欲しかった．

以上のような注文は，釈迦に説法のたぐいかも知れない．とにかく，気象学書として近来にない良書といえる．なお，著者は，この本発行とほとんど同時期に，同じ「気象調査法」という本を，気象研修所通信教育教科書として書いているが，全然内容の違ったもので，これまた推賞に値するものである．

非才をかえりみず，迷評をあえてしたが，読者に問題を投げかけ，考えさせる．この種の本が今後も出ることを期待して止まない．　（気象研究所　奥田穣）

〔書　評〕

和達清夫監修：日本の気候

東京堂，昭和33年11月刊　定価 2800 円

本書の企画，篇集，執筆には50余名の専門家が当り，現在迄に得られた日本の気候についての殆んどあらゆる面に関する知識が含まれている．本書を一読して思うことはこの質・量共に優れた執筆者達と，気象庁の全国的組織の力がこれだけの内容の本をしかも比較的短時日に完成させたということである．極言すれば，今まで，気象庁その他の資料を照会しなければならなかった日本の気候に関する事項の殆んど総てが本書によって解答を与えられるのではなかろうか．その包含する所は「気象学概論」から「スポーツ，保養等と気候」のような面にまで及び，気候図表としてのみでなく，気候と社会活動全般についての絶好の参考書としての価値は大きい．

特に，第2篇の「各地の気候」については本書の企画により始めてその地方の気候誌を完成した地方もあると聞いているが，第3篇の信頼度の高い最新の気候図表と共に貴重な文けんといえよう．

以上述べたように，利用者の立場からみて殆んど申し分のない内容と思われるが，一門外漢の注文として，あるいは的はずれの点もあろうが，二三気のついた点を挙げてみたい．

第1篇の内容は第1章，気候学概論（気候の概念，気候要素，気候因子，気候区，気候型，気候変動），第2章日本の気候（日本の気候とその原因，日本の四季，気候要素の分布，高層気候，暴風雨，気候の予想）であるが，冒頭に気候の概念として“長年を通じて見るとだいたい場所と季節に固有なよく現れる状態が存在し，このような普遍的大気の状態を気候と呼ぶ”と述べ，その概念に則って日本の気候を集積したものと思われる．然し乍ら，本書の内容には必ずしも定義には含まれないと思われる事項が相当盛り込まれている．例えば，暴風雨等むしろ異常気象の統計といった種類の事項などは冒頭の気候の概念よりは気象現象を場所をパラメーターとして統計的に処理したものと考え，常識的に気候学の対象として扱っているように考えられる．

又，気象学との境界についても，判然とした解説がなく気象学上の概念を充分消化せずに取り入れているような点も見うけられる．例えば，気候，天気等の述語については比較的多くの言葉を費やして解説しているにも拘らず，第2節，日本の四季においていきなり，“冬の天候”等全然断りなしに天候なる述語を使い，季節の分類に適用している．各季節の天気の普遍的なものを天候と呼んでいるのであろうか．英訳すれば天気も天候も weather となり，ニュアンスの相違は微妙であろうが，もう少しその取り上げ方について解説がなされていたら，もっとすっきりしたのではないだろうか．

「気候要素の分布」は当然気候図表類が主となっているが，このような図表類こそ気候書の生命で，利用度の高いものであり，慾をいえば図はもっと大きく見易くして貰いたかった．

「高層気候」を取り入れたことは本書の特徴であり，外国にもあまり例をみない所であろう．五年間の統計では，真の気候といえるかどうか疑問は残るが，今後資料の集積によってより完全な高層気候といったものが集録されることを期待したい．（目次に高層気象表となっているのはミスプリントかあるいはこの点についての深慮であろうか）．

以上述べた点は本書の価値を損なう程の欠点ではなく，その利用価値は非常に大きく，今後各方面の要望に充分応えて，大いに活用されるものと確認している．一方，本書のごとく，読者層が広く厚いことは，篇集を非常に難かしくしている点と思われるが，今後，気候学の進歩，資料の集積，改善により，版を改める毎に，更に一層完全なものになることを期待したい．（関口理郎）